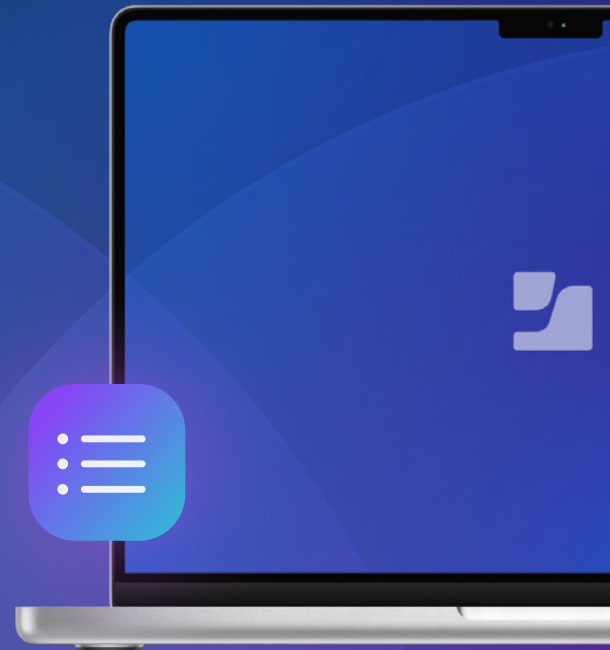




組織のMac管理モデルの 拡張性を確認

該当する項目にチェックを入れ、
最後に合計数を確認しましょう。



1.



アップデートとコンプライアンス

- ☐ 新たに導入したMacでユーザが業務を開始するまでの間に、コンプライアンス確保のための手作業がいくつも存在する。
- ☐ デバイスのアップデート適用状況をリアルタイムで把握できる仕組みがない。
- ☐ アップデートに失敗した場合、チーム内の誰かがその事態を把握してアップデートをやり直す必要がある。
- ☐ アップデートが配信されると、作業が遅れるなどしてユーザエクスペリエンスに悪影響が及ぶ。

2.



可視性とコントロール

- ☐ 問題が発生したり、監査で指摘されたりしないと、構成ドリフトの検出が難しい。
- ☐ コンプライアンスのステータスを確認できるのは、レポートやイベントリチェックの実行後のみ。
- ☐ ユーザからチケットが送られてきて初めて、デバイスの問題を発見できることが多い。
- ☐ 組織として意図した構成が正常に適用できているかどうかの確認に、IT担当者が日々多くの時間を費やしている。

3.



拡張性とレジリエンス

- ☐ 新しいデバイスを追加すると、それに応じて管理業務の負担が増えていく状況にある。
- ☐ モバイルデバイスやリモートで使われるデバイス、頻繁にオフラインになるデバイスに対しては管理効率が落ちている。
- ☐ デバイスのコンプライアンス維持を目的としたスクリプト、ポリシー、ワークフローのメンテナンスに多くの時間を費やしている。
- ☐ Appleデバイスの台数が増えると、(ほぼ) その増えた分だけ管理業務の労力が増大している。

i

上記チェック項目はなぜ重要か

従来型の管理モデルでは、IT部門が成果を出すための活動や成果の検証に絶えず追われることになります。これに対して、最新鋭の「モダンマネジメント」モデルでは、理想とする状態を定義すれば、あとはデバイスが自律的にコンプライアンスを維持します。今回チェックを入れた項目が多いほど、成果ではなくプロセスの管理に時間を取られている可能性が高いことがわかります。

チェック数

✓

0～3個 → 効率的かつ拡張性あり

デバイス管理に対する現時点のアプローチで、現代のIT部門が必要とする成果を多数生み出すことができています。また、成果を出すための作業ではなく、成果の定義に労力を割くこともできています。以下で紹介しているガイドは、手作業をさらに削減したり、レジリエンスを高めたりできる余地がないかどうかの確認にお役立てください。

⚠

4～7個 → 運用効率低下の兆候が見られる

運用面の摩擦が蓄積しつつあります。デバイスが増えていくにつれて、非効率への対応が困難になってくるおそれがあります。ぜひガイドをダウンロードのうえ、モダンマネジメントモデルを実務でどのように実践していくか、そしてその結果何が変わるかをご確認ください。

✗

8～12個 → 手作業が多い

IT部門が、管理プロセスの維持管理に大きな労力を費やしている可能性があります。このままでは、成長に伴って複雑さが管理不可能な水準に達するおそれがあります。状態ベースのアプローチを採用すれば、オーバーヘッドの原因となっている状況を変えることができます。具体的な方法は、ガイドでご確認ください。

増え続けるAppleデバイスを効率的に管理するには？

アップデートの迅速化、リアルタイムの可視性確保、火消し対応の削減に向けた実践的なフレームワークをご覧ください。